

第1回瀬戸市基本構想審議会 議事録

- 1 日 時：令和7年9月22日（月）午後2時から午後4時まで
2 場 所：瀬戸市役所 北庁舎4階庁議室
3 出席者：瀬戸市基本構想審議会委員13名（うちオンライン参加2名）
 石川 良文（南山大学総合政策学部 教授）
 鷲見 英利（株式会社官民連携事業研究所）
 林 ともみ（ラジオサンキュー／瀬戸市障害者地域自立支援委員会）
 橋本 美香（大橋運輸株式会社）
 神田 すみれ（多文化ソーシャルワーカー）
 梅村 佳範（朝日インテック株式会社）
 浦田 真由（名古屋大学情報学部 准教授）
 伊藤 和真（株式会社 PoliPoli）
 吉澤 克哉（東海旅客鉄道株式会社）
 野々垣 賢人（瀬戸くらし研究所／株式会社きんつき）
 石川 圭一（土街人プロジェクト／株式会社双寿園）
 堀部 篤樹（愛知産業大学通信教育部造形学部 准教授）
 水谷 香織（名古屋学院大学現代社会学部 准教授）
 瀬戸市長 川本 雅之
 事務局（瀬戸市企画部政策推進課）5名

4 傍聴者：1名

5 議題及び議事内容：以下のとおり

発言者	内 容
1 開会（市長あいさつ）	
市 長	本市では、令和8年度をもって現行の第6次総合計画が終了を迎える。新たな総合計画の策定に向けて、本審議会を立ち上げることとさせていただいた。 本審議会においては人口構造の変化による様々な社会課題の顕在化が懸念される2040年を見据え、人口が減少する中でも充実したまちづくりを目指し、今後展開していく戦略的・効果的な政策の方向性について審議いただきたい。 様々な分野で活躍されている委員の皆様方には、4年後の市制施行100周年、さらにその先の100年を見据え、持続可能なまちの実現に向けた計画となるように、活発な意見交換を求めたい。計画は行政職員のためだけではなく、市民の皆様と共有する計画として策定していく。市民の皆様が瀬戸市の未来の姿にワクワクしていただけるような内容にしていきたいと考えている。
2 委員委嘱（委嘱状交付）	- (委嘱状を各委員に交付（机上配布))

発言者	内 容
3 会長互選・職務代理者指定	
-	(互選により、南山大学・石川委員が会長に選任)
石川会長	<p>総合計画は、自治体にとって非常に重要なものであり、市の将来的な方向性を示すものである。例えると、瀬戸市という船の羅針盤のようなものであり、市民の方々が乗るこの船において、どこに向かうのかその方向が定まっていなければ、市民の方々は非常に不安になってしまう。皆様と議論しながら、方向性をしっかりと示し、市民の方々が安心して、そして前向きに、色々なことに取り組めるようにしたい。この船の動力源は、市民、企業、もしくは市を支える様々な関係の方であり、皆で進んでいくことになる。</p> <p>第6次総合計画から約10年経っており、その間には、新型コロナウイルス感染症という大きな波があった。こうしたことを乗り越えて、社会ではまた新しい取組が進んできている。日本全体の人口が大きく減少し、先行きが見えにくいところもあるが、様々な機会・チャンスはあると考える。そういうものをしっかりと捉えながら、皆様と一緒に議論していきたい。リラックスして、自由にご発言いただければと思う。</p>
-	(石川会長より、名古屋大学・浦田委員を職務代理者に指定)
4 質問	
市 長	(瀬戸市基本構想審議会会长に対して質問)
5 協議事項	
(1) 次期瀬戸市将来計画の策定にあたって	
事務局	(資料の要点を説明)
石川会長	各委員、ご自身の専門分野から、2040年を見据えたこれからのまちづくりについてご意見を頂ければと思う。
鷲見委員	<p>毎年100を超える官民連携に携わっており、280自治体とのお付き合いがあるほか、内閣府企業版ふるさと納税マッチング・アドバイザーも務めている。</p> <p>最近自治体において目立ってきた課題としては、人口減少と労働者不足の2点がある。二地域居住等の様々な考え方が出てきている中、いかに人口を獲得していくのか、関係人口を獲得していくのかというのが多くの自治体の喫緊の課題になっている。</p> <p>2040年を見据えたこれからのまちづくりを考える上では、人口をどう増やしていくかだけではなく、市外で活躍する人に対して、瀬戸市内においてどのように活躍いただけるようにするのかを考えることも今後の課題であると考える。</p> <p>またその上では、市役所内の人材不足を見据えていかなければならない。副業等の考え方を市役所としてどう取り入れていくのか、あるいはその働き方に関する変革という点も考えていかねばならないと考える。こういった観点から、官民連携という考え方、市役所の活躍を見据えた意見を私の方からいくつかお話できればと思っている。</p>

発言者	内 容
林委員	<p>メディアの立場でも、スタッフ不足は問題である。パーソナリティがいないのではなく、スタッフが足りない状況であり、かなり危機感を持っている。災害時、役に立つ情報源が地元のラジオ局でなければならぬと思うが、実際に災害が起きたときに、果たして役に立つことができるのかと懸念している。</p> <p>福祉という点では、ますます高齢化社会になっていくため、社会保障の問題、介護の担い手の問題がある。知的障害児者の会の会長も務めているが、メンバーの中にもお子さんが50代半ばとなってくると、介護保険と福祉サービス等の切り換えに関わる問題も出てくるので、危惧しているところである。</p> <p>こうしたことを踏まえて、2040年はどんな時代になっているのかを見据えて、皆様にも意見を出していただいて、良いものができればと思っている。</p>
橋本委員	<p>運輸会社で人事と広報を担当している。市役所、社会福祉協議会との3者協定を締結させていただき、様々な活動を地域で行っている。</p> <p>当社では、社会課題解決への取組として、ダイバーシティ経営を取り入れている。色々なチャレンジ・挑戦をする場を与えていく過程で、企業が成長するという可能性に着目している。女性活躍の推進からスタートしたが、現在は外国人、LGBTQ当事者、障害者の雇用にも力を入れている。今年度は特定技能実習生ということで、海外メンバーもすでに順次受け入れをしている状況である。</p> <p>当社が継続的に取り組んできたダイバーシティ経営のノウハウ、経験を生かし、瀬戸市のこれからの方針に、意見を申し上げることで貢献できればと考えている。</p>
神田委員	<p>地域に暮らす海外出身者・その家族の生活サポートを行い続けている。瀬戸市国際センターでの勤務経験をきっかけとして今に至っており、瀬戸市にも縁がある。現在は、愛知労働局において、外国人を雇用している企業と求職者のマッチング、求職者の生活支援に携わり、保健所の通訳等も行っている。</p> <p>瀬戸市は外国人労働者も多く住む地域である。単身で短期間働きに来ている方、10年以上瀬戸市におり、定住している方など、様々な居住形態の方が入り混じる中、いくつかの課題がここ近年変わってきていると思う。こうした視点から、意見を申し上げることができたらと思う。</p>
石川会長	<p>ここまで4名の委員にお話しいただいたが、このタイミングで一旦区切り、少しディスカッションの時間を設けさせていただきたい。</p> <p>労働者不足の話が挙がっていた。全国的にも供給力不足の現状がある中、課題となっている点等について、梅村委員にご意見をお聞きしたい。</p>
梅村委員	<p>当社は、今は瀬戸市に本社を構えているが、2018年に名古屋市守山区から本社機能を移転した経緯がある。最近様々な企業の話を聞いていると、身近な企業でも、本社を瀬戸市から名古屋市へ移す企業もある。</p> <p>当社は名古屋市内にも拠点を構えているが、採用活動一つをとっても、都市部で働くことができるアピールに繋がっており、「名古屋オフィスで仕事ができますよ。」という募集をかけるのとそうでないのとでは、全く違う。企業活動を続けていくためには採用活動が上手くいかないことにはどうにもならない。</p>

発言者	内 容
梅村委員	<p>企業の立場としても選ばれるまちになつていかないといけなのだろうと感じている。当然、我々としてもできることはやつていくのだが、人々が都心の生活を望む方向に行くのは自然なことであるとも思う。</p> <p>その中でも、都心とは違つた魅力をこの瀬戸市周辺の都市が独自で考えていかなければいけないのではないかと思っている。</p>
吉澤委員	働きたい女性にとって、魅力のある働きの場が少ないと意見が多くの地域で挙がっているという印象を持っている。瀬戸市の状況はいかがか。
神田委員	女性が組織で働くことが難しいということで、個人契約をいくつか結ぶような働き方をしている。自身は瀬戸市での就労経験はない。
橋本委員	<p>働きながら子育てをした身として、時間管理は会社としてよくしていたと思う。時短勤務でも管理職になれたり、出勤・退勤に都合がつきやすくなったりなど、当社では仕事が人に合わせるようになっている。</p> <p>こうした取組が続ければ、各自が時間管理を行うようになり、女性の働きやすさにつながると考える。女性が働きやすいということはみんなにとっても働きやすいということとなる、というのは当社において言い続けていることである。</p>
林委員	<p>ラジオサンキューは働きやすさという点において寛容であると感じており、パーソナリティも含めて、融通の利きやすい環境である。</p> <p>一方、手をつなぐ育成会で聞いた話では、子どもに障害があるゆえにキャリアをあきらめて転職をした会員も多くいた。</p>
水谷委員	<p>名古屋学院大学で准教授を務めており、第6次瀬戸市総合計画策定の支援をしていた経緯がある。21カ所でタウンミーティングを実施し、ファシリテーターを務めた。</p> <p>10年前のこのような働き方をしていた当時、子どもは5歳程度であったが、やはり大変だった記憶がある。他の委員のお話を聞いてみると、働きやすさも10年前と比べて変わってきたのかを感じている。</p>
鷲見委員	<p>自治体が人材不足であるという話をしたが、中でも中小企業の人手不足が特に問題になっている。瀬戸市における企業の人材不足感を感じている企業はどのくらいの割合がいるのか。</p> <p>地元企業のPR不足により、卒業後の学生が残らないという課題を抱えている自治体もある。最近は、社会、地球に対して良い動きをしている企業に入りたいと考えている学生も多い。企業、自治体のPRをこうした学生につなげることも方針の一つになりうると考える。</p>
事務局	産業部門において調査を行っており、瀬戸市においても、どの企業も苦戦しているという状況である。また、地元企業においても、瀬戸市で働くことに対してPRに不足感があることについても同様の状況である。
鷲見委員	スタートアップの推進は、女性、外国人、障害者の雇用に対しても好影響を与える。今後調査を行ったものがあれば、ご共有いただければと思う。

発言者	内 容
石川会長	<p>これまでの話を振り返ると、生産年齢人口が減り、供給力が不足することはやはり大きな課題であることが分かる。</p> <p>ただ、女性や外国人、障害者などの中には、これまでに十分に活躍することができなかった人材も多くいると思う。例を挙げるのであれば、「女性は一般職」という古い時代もあったが、今はそうではない企業が大多数であると理解している。女性に限らず、外国人や障害者も含めて、雇用につなげていける施策は多くあると思う。</p> <p>また、他の自治体では、技術職の人材不足により、高卒者を採用するようにした例も出てきたとのことである。最近ではテレワークを望むニーズも高まっているが、こうした人材側の意識をとらえて、市としての政策を打っていただけたらと思う。</p>
梅村委員	<p>当社は、広報として、地域情報誌のフリーペーパーの作成や、瀬戸市内の廃校となった学校を活用しながらの女子サッカーチームの支援を行っている。企業としての意見を様々言わせていただければと思う。</p> <p>広報担当として、どれほど企業が良い活動をしていても、上手くPRすることができなければ周りの人には分からぬこともある。情報伝達の大切さについてお話をできたらと考えている。</p>
浦田委員	<p>瀬戸市近辺の地域にゆかりがあり、瀬戸市にも馴染みがある。地域でのデジタル活用を専門に研究しており、総務省の地域情報化アドバイザーを務め、自治体におけるデジタル関係の取組に携わっているほか、最近では、東海地方の自治体の総合計画の策定にも関わっている。</p> <p>これまでに高山市をはじめとする地域に実際に入りこみ、産官学連携による地域社会のDX化、高齢者のデジタルデバイド解消やデジタル活用をテーマとした取組を実施してきた。</p> <p>高校での探究活動の一環として、地域の課題解決の取組について、DXを切り口に考えてもらうという活動もしているが、こうした取組を通して、地元に愛着や誇りのある学生を育てるということも良い活動であると思う。</p> <p>「地域社会におけるDX」というとき、自治体DXと地域社会のDXの二つの観点がある。頑張っている自治体では自治体DXが進行しているが、地域社会へのDXではまだ途上の段階である。地域課題解消のためのDXに取り組むには、目的意識を持った実施ができればと思う。</p> <p>市民アンケートでは、愛着はあるが誇りを持ってていないという結果となっていたのが印象的である。こうした背景についても、細かに確認していければと思う。</p>
伊藤委員	<p>瀬戸市出身でありつつ、まさに流出した人材の一人である。経産省、総務省等の会議体に参画することもあるが、本審議会には、特に強い当事者意識をもって参画している。政治・行政領域のスタートアップ企業として、政治領域と企業とをオンライン上のプラットフォームでつなげることを業務内容としており、月間50万人以上の利用者がいる。</p>

発言者	内 容
伊藤委員	<p>瀬戸市は将棋の藤井聰太さんのような著名人を輩出しているだけでなく、起業家として活躍する出身者が多いことも特徴で、珍しく、すごいことであると思う。教育なのか、風土なのか、何かしらの要因があるのではないか。一度市外に出て初めて分かった部分もあるが、文化・芸術・クリエイターをはぐくむ町であるということも、大きな特徴のひとつであり、今後強みになっていくと感じている。</p> <p>次期総合計画に向けた視点だと、これまでに皆様が言及されている通り、人材、お金といったリソースが減っている中、多様化する住民ニーズに対応することは困難であるため、思考を変えていくことが必要だ。</p> <p>今後は、自治体の「運営」というよりは、自治体の「経営」として取り組んでいく必要がある。ビジョンを共有して変わり続けること、官民共創・市民共創を進めること、デジタルの徹底活用、E B P Mの推進、国施策との連携を追っていく必要がある。</p> <p>2040年、かつ2050年を見据えて危機感を抱く人が多い中、瀬戸市としても様々なアイデアが出てくることと思うが、戦略的にリソースを集中させる見方も必要になる。皆様との議論を通して勉強させていただきたい。</p>
吉澤委員	<p>J R 東海において、関係人口の創出をメインテーマとする新規事業ワーキンググループの立ち上げを行い、これまでに、累計27地域で4千人以上の関係人口の創出に携わってきた。</p> <p>関係人口として関わる人とのつながりにはグラデーションがあると思っており、ふるさと納税のような緩いつながりから地域の祭り等に来てくれるような強いつながりもある。こうしたつながりを考える上で最も重要なのは、自分たちがどのような地域にしていきたいのか、どのような人に関わってほしいのかという点について明示することである。これがきちんとできている事例は多くなく、魅力的に表現することは大事であると考えている。</p> <p>最近では、関係人口から一步踏み込んで共創人口という言い方を使い始めたが、企業も含めた地域の資源を使いながら、共に何かを面白がりながら作っていく必要なのではないかと思っている。</p> <p>愛着・誇りについては、外からの視点を持つまでは地元の良さに気づけないこともあると考える。外から関わってもらう人との間にどのような関係が構築できるかも考え、意見を出せたらと思う。</p>
石川会長	ここで一旦区切り、ディスカッションの時間を設けさせていただく。
石川委員	伊藤委員は瀬戸市を出られてからどのくらいになるのか。
伊藤委員	瀬戸市を出てから10年間程度経過している。
石川会長	<p>私も、中学生くらいの時には地元に誇りはなかったが、一度外から見て帰ってくると良さを感じることも実感としてあった。</p> <p>外に出ていった人が少しずつ里帰り等の機会に帰ってきて、愛着を持ったり、誇りを持ったりできるようになるまで色々と見ていただける機会があると良いと思う。</p>

発言者	内 容
伊藤委員	<p>東京から見ると、瀬戸市もさることながら愛知県の「特異性」にも目がいくようになった。愛知県が成長している中で、今回の市民意識調査では「これから衰退しそう」が多く集まっているのはどうにかしなければならない。</p> <p>愛知県、瀬戸市は元々スタートアップが盛んな地域だったり、取り組みを応援するような雰囲気があるわけではなかった。そのような意味では、瀬戸市に対して明るい展望が持てないのも実感として理解できるところであり、この計画策定にあたり議論したいところである。</p>
梅村委員	<p>当社には、様々な自治体から、地域内に拠点を設立して欲しいという旨の営業がよくくる。八戸市にも拠点を持っているが、地域をあげてのPR・誘致活動はこうした熱心な自治体に瀬戸市が劣後しているとも感じる。瀬戸市として取組の姿勢を見せていくことが重要なのではないか。</p>
伊藤委員	<p>本社を瀬戸市に移転したのはどのような経緯があったからか。</p>
梅村委員	<p>元々当社はワイヤーロープの製作を行う企業であったが、トヨタとの取引を開始したことで名古屋にも販売会社を作ったのがはじまりであり、瀬戸の工業団地に生産・開発拠点を設立したことを契機に、本社機能とも近づけた方が良いと移転に至った。</p> <p>その後、瀬戸市にも寄り添っていただきながら、古瀬戸小学校の跡地活用をはじめとした協定を結ぶに至っている。</p>
石川会長	<p>起業や産業の話が多く挙がっていた。チャレンジ精神はあるが、お金がない、場所がないといった人に対して、瀬戸市が受け皿になれるとなれば良い。</p>
野々垣委員	<p>末広商店街にて、初期費用やノウハウといったハードルに阻まれることなくチャレンジできる場所として、瀬戸くらし研究所という、地域でのチャレンジの踏み台に慣れるような拠点の運営を行っている。</p> <p>何故瀬戸で起業をしたのかとよく聞かれるが、その時に答えるのは、瀬戸市はインディーズバンドのようなものである、ということ。とても良い音楽、声なのに、意外にもみんなが気づいていない側面がある。レトロ感のある良い商店街があるがまだ気づかれている方も多い。最近では住宅も増えてきて、少しずつメディアデビューしかけてきたのかと思っている。</p> <p>そのような期待をしている中では市民意識調査の愛着と誇りの点が気になっている。愛着は主観的な評価、誇りは客観的な評価や将来性を踏まえた感情であると解釈しており、ここにギャップがあるということはチャンスであると受け止めている。</p> <p>地域の魅力を再発見・再構築していく、対外的に発信していくようにすることが今回の総合計画で大きく方向付けられると良い。</p>
石川委員	<p>まさに地場産業である陶磁器メーカーを経営している。瀬戸市で作っている茶碗などを旅行先で見かけたときに、慣れ親しんだ瀬戸の陶磁器もすごいなと感じた経験がある。</p>

発言者	内 容
石川委員	<p>コロナ禍では業務用食器の需要が落ち、9割の売り上げが落ちる中、食器の家庭内需要の増加に対応し、様々な器を作っていました結果、現在は製作が追い付かないほどになっている。もう一つ、土街人というローカルコミュニティを運営している。地場産業を切り口に、「健全な癒着」を掲げて事業を実施している。</p> <p>最近では、旅する大学、国際芸術祭でのトークイベントなど、地域との連携を広めるプロジェクトを実施中である。</p> <p>市民意識調査では悲観的な意見が多くみられるが、自身としてはあまり悲観的な見方はしていない。瀬戸市にはポテンシャルはあるのにもったいないと思うことはあるため、そういう観点から考えられる計画にできればと思う。</p>
堀部委員	<p>大学の通信教育部に所属しながら、建築を教えている。建築界で評価されているはずの学校建築を視察に行くと、使い勝手が悪いという評価がされている状況にしばしば遭遇したことをきっかけに、設計者・利用者・地域をつなげた学校づくりに携わり続け、派生して図書館や市役所づくりにも関わるようになっている。</p> <p>中山間地域では一次産業を中心になっているが、人口が減る中でも、学校教育を上手くやりながら産業も持続させるような地域ができると良いと考えている。</p> <p>豊田市の足助で子どもに建築を教えるという活動も行っているが、子どもからは、足助にもイオンが欲しいなどといった意見があがることもある。外からの視点から、町を失ってはいけないことについて話をすると子どもの意識も変わってくるので、その地域が持つ価値について伝えていく教育も大事であると感じる。</p> <p>女性の働きやすさの観点でいくと、自身にも子どもがいるが、在宅勤務が多い仕事柄子育てがしやすい側面はあった。女性の働きやすさは、男性の働く環境にも大きく影響されることを感じた。そのような視点からも考える必要はあると思う。また、女子サッカーとまちづくりの話を梅村委員にしていただいたが、スポーツだけでなく、子どもが取り組むクラシックバレエなどの芸術文化も上手くまちづくりにつながれば良いと考えている。</p>
水谷委員	<p>2年前から実務家教員を務めているほか、起業してのコンサル・ファシリテーターとして活動している。本審議会のメンバーは非常に良い人が集まっていると思っており、若い人の意見も取り入れられるようになっている。</p> <p>今後の総合計画において自治体経営を考える上では、従来の総合計画から大きく異なる視点もあると考えている。一つ目は、ネガティブな方向にも向き合うリスクマネジメントの視点。二つ目は超長期を見据える視点。三つ目は、情報が人々の認知空間にどのような影響を及ぼすかを考える視点である。</p> <p>望む未来を考えることもとても良いと思っているが、さらにそれに加えて、最悪のケースを想定することも経営を考える上では重要であると考えている。超長期の視点として、2100年頃を見据えた人口推計、出生数の減少を見込んだ推計も加えてすべきかと思う。</p> <p>また、地域への定着の方策、空いた土地の活用と安全保障についても検討を加えるのが良いと考える。こうした推計を基に、何のための瀬戸市なのか望むあり方に近づくには何をすればよいのかという点についても議論を深められればと思う。</p>

発言者	内 容
石川会長	以上で全ての委員にお話しいただいたので、本日最後のディスカッションの時間を設けさせていただきたい。
神田委員	<p>子育て、愛着・誇りの話が出ていたが、若者議会を行っている新城市では、拠点は東京でありつつも、新城市に戻ってきている若い人もいると聞く。この要因を考えると、若者議員になった10代の経験をもとに、地域への愛着を育まれていることが考えられる。</p> <p>10代のうちに、仕事や生きやすい生活の基盤をつくる選択肢を知っておくことで地域に残りたい若者も増えると思われ、残らなかつたとしても、伊藤委員のように役に立てることがあればいつでも力になると言ってくれるような若者が増えるのではないか。</p>
石川会長	自身も、瀬戸市で子ども議会の経験があり、若いうちの経験の重要性には共感する。
堀部委員	教育の話だと、教員は異動するものであり、地域のことを教員から伝えられないという状況がある。高校ではすでに事例があるが、探求学習などを通して、先生以外にも、地域の核となる人材を育てて、学校の授業に差し込んでいくというような取組も考えられるのではないか。
神田委員	学校に入り込んでの取組は重要であると思う。探求学習は愛知県でも盛んに行われているが、瀬戸市でも、同様に地域の人が現場に入っていくことができれば良いと思う。
伊藤委員	瀬戸市の産業を見ると、経年的に陶磁器産業の出荷額の減少傾向が見て取れる。これを踏まえて、産業に付加価値をどのようにつけていくのか、どのように考えていくのか、石川委員にご意見を伺いたい。
石川委員	<p>近年、ようやく価格を上げられるようになっており、現状は良い状態であったが、これまでにおいてそれがなかなかできていなかったという経緯が結果的に担い手不足につながっている。</p> <p>安く大量に生産するという時期はあったが、その方針だと美濃焼には負けるので、瀬戸焼の特性を生かした生産方法・商品をアピールして付加価値を高められている今の流れを続けていく必要がある。</p>
林委員	<p>教育の話に戻るが、コミュニティ・スクールが少ないという話がオンラインディスカッションで挙がっていた。このような点について、他地域に学ぶことも良いと思う。</p> <p>瀬戸市の子ども・若者会議では、熱心に議論を交わす子どもの姿があった。この構想にも、子どもの意識が大切にされると良いと思う。</p>
吉澤委員	自治体経営を考えたときに、財政の話は避けて通れないと思う。鷲見委員に、どのような財政戦略を立てていく必要があるのかをお聞きできればと思う。
鷲見委員	今後、改めて数字を確認しながら、他地域の事例についても紹介していくと思う。

発言者	内 容
鷲見委員	やはり愛着・誇りは一つのテーマになりうる。様々な企業、スタートアップの推進を地域と共に進めていく中で、瀬戸市外に出て、引っ張っていく人材との関係をつなぎ留め、企業としての関係人口のあり方を模索することについて考える必要があるのではないか。
石川会長	本日は多くのご意見をいただいた。行政だけでは限界がある部分もあるため、民間や地域の方と協力し合いながら、瀬戸の未来を築いていきたい。 今後、市民の声や本日の議論を踏まえ、総合計画をブラッシュアップしていくと思うので、引き続きよろしくお願い申し上げる。
6 その他	
事務局	(今後の審議会日程について説明)
7 閉会	

以上